

The Presence of Human Being (2)

—A Philosophical Meditation—

Seishi ISHII

ABSTRACT: This is the second part of an article that attempts to clarify philosophically the meaning of human being in the present situation of the world.

The modern age can be characterized as the time when the tendency of a split of man's being has developed in all aspects of our lives and the present age as the time when this tendency has become a great question and we have begun to be conscious of the problematic and critical character of a human being and its endless progress.

In this second part of the article we examine the essential problems of man in the present age in regard to the split of man's being, especially in the field of society, arts, history and religion. In the problematic situation of the modern world all our deed must be brought into question. This situation in which all the art of being has become questionable is nothing but nihilism in the present time.

人間の現在

—— 哲学的省察 —— (二)

石井 誠 士

4 現代の社会の問題性

教育、医療、環境について、我々は現代の人間の「分裂」の有り方を見て来たのであるが、同様の構造は、現代の人間の営む社会生活においても認めることができる。

現代の社会の一つの大きな特徴は、過去において社会の基本単位をなしており、そこにおいて初めて人間形成が可能であった神聖にして不動なる社会の基本型が土台から崩壊し始めた、ということである。

例えば、国家は民がそこにおいて国の民となり、各々が個性を発揮しながら、共同で創造的な仕事をすることを可能にする場所であった。その場合、国家の成員が自らをその国の民と自覚するようになる統一の根拠は、成員の身体の中に流れる共通の「血」や、成員の生の窮極的な意味・目標をなす民族の神であり、国王や首相のような統治者はこのような「血」や民族の神における民の統一を彼等の地位と叡智と力によって民の中に現実化する者であった。ところが、現代では、もはやこのような意味の国家はどこでも崩壊しつつある、と言い得る。

老人でも、若者でも、国家を終極目標となし、そのことによって自らの身を立てる、という在り方、国家に民の精神の基底をも、またその具現体をも見出す、という在り方はもはや過去のものとなった。(イラムの諸国家の場合は例外と言える。)

同様の崩壊現象は学校にも起っている。先には(本節(一))、知育と德育の「分裂」について述べたが、そういうことのもう一つ根本には学校という、人間形成にとり最も重要な場の社会的構造の解体ということが考えられるであろう。学校の場合にも、生徒の知育と德育を一つに可能にする力は、個人が個人であって共同の活動をなし、共同の活動が個人を個介として育成する、つまり、人間の個人性と共同性両方の根柢の理想とか、目標とかに求められねばならないが、それが今日では欠如しているのである。とかく抽象的技術的に傾きがちな知育の欠陥を補うものとして、体育や芸術が重視されるのは当然であるが、それだけでは問題は片付かない。教師が教師として教壇に立ち、学習と生活を生徒と共にし、また、生徒が教師及び同級生との日々の出会いを通して人間の理想をひたすら追求する、そういう人間形成としての教育の根源的人間関係が理想や目標の喪失と共に崩れつつある。教師を真に教師とするのは、彼の全人格を貫いて働く不動の理念であり、その理念の自然な表現としての厳格さや慈愛であるが、それが稀薄になるとき、教師はもはや自らの職業に使命感を抱き得なくなるし、生徒も知識や特殊な技能の修得以上のものを学校に期待せず、自己を越えて、自己を實現しようとする意欲を失うようになる。現代の発達した社会に現われた教育の問題の根本は、実は、師弟という人と人との関

係の土台の喪失に求められねばならない。

そして、更に、今、国家と学校について見たのと同じ崩壊現象が、現代社会の家庭の場面においても出て来ている。社会の最も基本的な単位は家庭である。家庭は元来神聖なもの、それ故に、人の決して穢すことのできない不動のものを意味していた。家庭に背くということとは、自らの土台に対して背くこと、従って、神に背くことを意味していた。それ故、昔から家の中心に神棚が祭られたり、家庭の祝い事や忌み事、つまり誕生、結婚、葬儀等が全て神の名のもとに、神前で行われたりした。男と女が一体となって、一つの家で生活し、子供を生ま育てながら家庭を築いていくということに人間の存在の最も美しいもの、基本的なものが見られ、しかも、そういうことを可能にする力として常に神が存在していたのである。だが、今日では、家庭が人間存在の最も美しいもの、基本的なものであり、神聖なものである、という見方は一般的でなくなつて来ている。

ピカート (Picard, Max) は『ゆるぎなき結婚』の中で、「社会や国家や芸術は次第に原初的なものから離れて複雑化して来ているが、唯だ結婚だけが原初的なものを保存し、現代世界の混乱を制御する力を有する⁽¹⁾」と語っている。彼は、結婚において、混乱した現代世界を立て直す原理と力とを見ているのである。しかしながら、現代の成熟した社会では、結婚、そして家庭が本来有する不壊の原初性、我々がいつでもここに帰つて来、またいつでもここから始めることができる人生の原点の意味が見失われて来ている。相互に絶対に独立して一体、そして、親はどこまでもこの子に対してこの親、子はどこまでも

この親に対してこの子である、という厳肅な関係が見えなくなりつつある。結婚を「偶然な出会いへの終身刑」として拒絶する若者や子供を産もうとしない夫婦も増えて来た。かくして、今日では、家庭が人間存在の原点としての意義や機能を喪失して来ている、言うことができるのである。

あるいは、人は、現代の社会全般に見出されるこのような崩壊現象を、実際は崩壊ではなくして、変容であり、多様化である、と考えるかも知れない。例えば、国家の場合でも、色々な形の国家が考えられるのであり、ソヴィエトのような、社会主義の方向を取る国家もあれば、アメリカのような、多くの人種、民族と多くの州を一つにした国家もあるし、イスラムのように宗教を根底とした統一国家もある、という具合に、国家の形態自体が歴史的にも地域的にも多様である、と言ひ得る。家庭の場合でも、いわゆる結婚という形を取らない男女の形、子供を持つとしない夫婦の在り方、あるいは、夫婦や親子の結びつきを余り厳密に考えず、ごく偶然なもののみなし、たとえそこに必然性を見るにしても生物学的な、本能の必然性に限る、というような家族の在り方も可能なものであり、それらのいずれの在り方をも家庭の変容として把えようとすることはできる。国家でも、学校でも、家庭でも、それらが時代や場所に依じて多様な、また、それぞれ個性的な変容を遂げて行くところに、社会の現実性が存するのである。

確かに、現代のような多様化の時代、個性化の時代、価値観の「多元論 Pluralismus」の時代には、社会の形についても、画一的な見解は避けられなければならないし、色々な形の国家、色々な種類の家

庭があつて構わない。伝統的な、形式を踏まえた社会観からすればその崩壊形態と見られるような社会の種々の在り方も、社会の多様な、それぞれ個性的な変容と考えることができる。一つの形に固執せず、絶えず古い形を壊しては新しい形を創造して行く動態が本来の社会の姿である。学校の場合でも、公立であれ、私立であれ、あらゆる自由な変容、新しい試みが現われて来てよいのである。

だが、問題は、まさしく、社会がそのように多様に変容しながら、自己形成して行くときに、それぞれの局面において、社会の基本型、人間がどこまでも個人であつて共同をなし、共同であつて個人であるという基本構造が失われるところに有る、と言わねばならない。

家庭の場合に、様々な形態の家庭が考えられることは確かである。しかし、夫と妻、父と母、親と子、兄と妹といった諸関係には、人間の存在の基本構造が含まれている。そして、その基本構造は人格的な愛の関係の理法であつて、決して単に社会学的生物学的なものではない。それは契約や「血」による結びつきであると同時に、そこには相互の信頼の要素が存するのである。現代の家庭の崩壊現象において一番根本的なできごとは、人と人との間の信頼関係の喪失である。現代の個性化は人間の基本構造から逸脱する方向、基本構造を否定する方向に向う面が強い。そして、それは決して真の個性の確立とはならない。変容ということ言えば、個性化した社会は皆、愛の基本構造そのものの自己発展でなければならないが、実際には、愛の基本構造を見失ひ、むしろ、それから遊離する傾向が強いのである。

だが、いかに崩壊したとしても、人間が社会的存在であることをや

めるわけではない。何らかの社会を離れて個人は成り立たない。従つて、現代でも、新しい形を取つて国家、学校、家庭は存在するのである。その場合に、愛の基本構造から遊離した個々人が単なる個々人である在り方を越えて世界を企投し、自己を維持し、発展させて行くときに、彼等は自己の外の何らかの新旧の共同体の理念や制度を選択してそれらに所属することになる。そして、生存の孤立と空虚の意識を深めた現代の大衆にとり、そのような集団の理念は自己を保存し救済する唯一の残された可能性を意味する。だが、我々はこの、現代の成熟した社会における人間の根本的な非自由とそれに基づく他律性、更に言えば、コレクティブイズム、集団主義、ファシズムへの傾向を見ることがあるのである。一方において、古い国家、学校、家庭等の崩壊、他方において新しく抬頭する上から管理統制する社会構造。現代の人間は個性や自由を主張し擁護する名目で、自己の外の体制に従う安楽な生活に身をゆだねるのである。

このように考えるならば、現代において、人間は、社会の面においても、決して根源的な在り方を実現しているとは言えない。個性、自由、解放の運動自体が社会の大きな崩壊と共に、より深い束縛、服従を結果するのである。そして、個々人の個性、自由の追求とより深い束縛、服従への願望という人間性の「分裂」は、役所や企業のシステム化、コンピューターやロボットの導入による仕事の高効率化、そして更にそれらに対応した人材を養成せんとする教育の画一化、システム化、高効率化によって、愈々深刻なものになって来ていると言うことができる。

現代社会における人間の「分裂」——それは、先ず、国家、学校、

家庭等の社会の基本単位における人と人との間の「分裂」であり、それがいかに深刻であるかは、我々の身近に経験しているところである。

しかし、「分裂」は、より根本的に、人間の、自己の属する社会に対する姿勢において見られるのである。現代の人間は、一方において、個性化、自由、自律への欲求を非常に強く持つ。この欲求が古い社会に解体を迫ったのである。だが、他方、同時に、現代の人間において、集団化、何らかの権威や権力への追隨、他律による自由の売却への願望も極めて強く有る。個人主義的傾向と集団主義的傾向とが個々人の中に同居し、並存して、真に根源的創造的個人と社会を形成することを阻んでいる。その具体的な現われは、一番はっきりした形では、いわゆる資本主義国と社会主義国の対立である。けれども、今日では、この「個人志向」と「全体志向」の「分裂」の問題は、地球上のあらゆる場所、あらゆる社会の人達に起っているのである。そして、一見人間の個性を重視し擁護せんとするかの如く見える価値観の「多元論」が却って個々人に思想の自由を棄てさせ、或る特定の新旧の権威への随順、権力への集中を求めさせる「思想のファシズム」に陥るという矛盾は、社会主義社会でも資本主義社会でも等しく見られる現象である。

註(1)ピカート、M『ゆるぎなき結婚』(佐野利勝訳)、みすず書房、十二頁。

5 現代の芸術の問題性

現代の人間の存在の「分裂」ということが、我々の眼前にはっきり

石井誠士：人間の現在

として示されるものに芸術作品がある。

歴史上のあらゆる芸術作品は、皆その時代々々の統一的精神を表現したものと、と言える。例えば、パドヴァのアレーナ礼拝堂のジョットーのフレスコ画、『キリストへの哀悼』を見るとき、それは中世の人間の生き方の最も純粋な表現であることを思わざるを得ない。そこには、信仰の生の平安と調和が描かれているのである。それに対して、レンブラントの宗教画には、実生活の情景描写を通して信仰の内なるドラマがその深さと厳しさにおいて形象化されている。近代の芸術家の場合には、現実の人間の個性とその生活の瞬間とに真理と美が認められようとする。そして、それは、「宗教改革後」のキリスト教の精神の表現であるのである。更に、十九世紀イギリスのターナーの風景画になると、絵画は自然の大きいなる現象の描写を介して、内なる不安な、而して無限に自己を越えて高揚する精神を表わすものとなる。それは、ロマン主義精神の動き、自己の矛盾とその止揚の瞬間を示している。そのように、芸術作品はいずれも、その時代の統一的精神の表現である、と言い得るのである。

そういう点では、現代の芸術作品も同様である。現代の絵画、彫刻、建築、音楽、劇、詩、小説等、いずれも時代精神の表現をなしている。そして、芸術作品の価値は、意識的にせよ、あるいは無意識的にせよ、どれ程徹底して時代精神を表現しているかによって決定されるのである。その場合に、現代の芸術がその創造において表現しているものは、私は「分裂」の精神である、と言ってよいように思う。

そのことは、先ず、芸術の世界の在り方全体について見ることがで

きる。現代の芸術においては、それぞれのジャンルの中でも、思想や理論や手法が人やグループにより非常に異なっていて、もはや相互の間に芸術の共通の地盤がなくなつたかのである。「個性」の時代である二十世紀は、果てしなき「分裂」の時代なのである。

例えば、現代アメリカの作曲家ジョン・ケージ (Cage, John) はその講演『サティ擁護』の中で次のように語っている。

「現代芸術の最も顕著な特色の一つは、芸術家達が、みんなの一致した意見に基づくやり方によってではなく、個々の考えによって仕事をしているという点にある。このような状態が果して喜ぶべきものかどうかは、近代思想のきまり文句を考慮に入れてみたとしても、はっきりとは解らない」と。

現代音楽の動向に注目するとき、我々はいかに多様な方向が同時に進行しているかを知って驚かざるを得ない。作曲家は各自個人として仕事をしており、皆他の人と意見が合わないことを知っている。常に新しい素材、新しい語法、新しい構造等の思いつきが追求される。一つの新しい作品とは人目を引く珍奇な実験を意味しているのである。そして、そういう、絶えず新しいものを追求する現代の作曲家の仕事の特徴づけるものは過去から伝えられた音楽の徹底的破壊である。

伝統の音響、旋律、和音、リズム、方法、形式等の意識的拒否であるジョン・ケージの場合、伝統の音楽の構造の破壊は彼のいわゆる「不確定性」の理論によってなされた。例えば、彼の『ヴァリエーション』の作品では、透明な二十センチメートル四方のプラスチック六枚の一枚一枚に点と線のパターンが描かれていて、それらを重ね合

わせることによって生ずる多様な図形が演奏される楽譜となる。つまり、楽譜自体が偶然性に従って生じ、無限のヴァリエーションの可能性を有することになる。ケージは作曲のプロセスを偶然のチャンスにゆだねることにより、作品に作者の主観性が介入して来ることを徹底的に排除しようとしたのである。それは同時に、作品からの作曲者の自由を確保することをも意味しているが、同じ自由が演奏者にも与えられる。演奏者はこの図形を自由に解釈して音楽を作っていくことになる。彼は図形をヒントに、想像力を駆使して無限に音を創造して行くことができるのである。この場合、作曲家と作品と演奏家は各々他から全く独立である。言うまでもなく、このような作曲の在り方はそれ自体孤独な、自閉的な現代の人間の姿を示している。そして、このようにして生れた曲が演奏家によって多様に音像化されるとき、出て来る音は当然既存の協和音の音楽、すなわち五線譜に書き記された音楽とは全く違ったものとならざるを得ない。全ては点的線的な偶然な音の偶然な瞬間的な集積と離散とだけになる。それは徹底的な否定、「分裂」の音楽である。統一点はどこにもない。もし、このような作品に尚芸術作品としての統一を見るとすれば、それは、統一点が無いという、その無を貫徹する意志の統一であるであらう。

こうしたケージの芸術理念を端的に表わしたものとして、前衛画家ロバート・ラウシェンバークの作品への註釈として書かれた次の文章が挙げられる。

To whom

誰に

No subject

主体が無く

No image イメージが無く

No taste 趣味が無く

No object 対象が無く

No beauty 美が無く

No message メッセージが無く

No talent 才能が無く

No technique (no why) 技術が無く (なぜが無く)

No idea 理念が無く

No intention 意図が無く

No art 芸術が無く

No feeling 感情が無く

No black 黒色が無く

No white (no and) 白色が無い (そして、も無い)

過去において芸術の主体、素材、内容、方法等とみなされて来たものの一切を否定するとき、一体何が残るか、という問いは無論可能であるが、ケージはむしろその否定行為を実際にやってみせるのである。一切に対する「ノー」が彼の音楽である。

よく知られているように、彼の『四分三十三秒』という曲は、演奏者がピアノを前にして静止し、四分三十三秒間一音も発しない作品である。それは、現代芸術の否定行為の一つの極点を指し示している。

この、作曲ではケージ、造形芸術ではマルセル・デュシャンなどに代表されるようなアヴァンギャルドの徹底した否定の芸術の後に、その一つの新しい展開として、だが、実際には、おそらくそれへの対

決の意図を持って生れた芸術の運動が、一九七〇年代から八十年代にかけてのパフォーマンス (performance)、あるいは、いわゆるポストモダン・アートである。この、極めて多様な方向を持った芸術の運動においても、伝統的芸術への「ノー」、その表現方法の放棄の姿勢ははっきりしている。唯だ、ポストモダンの場合には、前時代の、根柢に向ってひたすら破壊、否定を遂行して行く傾向に対して、むしろ肯定性の面、過去であれ、現在であれ、あらゆるものを肯定して出して来る傾向が強い。そこでは、過去の様々な断片、現在のあらゆるできごとが無造作に、無秩序に引用されて出て来るのである。

例えば、ドイツの作曲家E・カルコシュカのポリメトリックとポリクロニーの手法を用いた一つの曲では、モーツァルトのヴァイオリン・ソナタ、ベートーヴェンの『歓喜の歌』、ナチの軍歌及びインドネシアの民謡の各々の断片が時差をつけて演奏され、次々に重ねられ、更にそれらが電氣的に混ぜ合わされて行くうちに、最初の四つのメロディーがほとんど聴き分けられないような大音塊に成長するようになっている。

あるいは、アメリカの写真家サンディ・スコグランドの『ハンガー』という作品では、壁にも入口のドアにもすみずみまで針金製のハンガーがかけられ、更に床の上にも一面にそれが敷きつめられた部屋にパジャマ姿の青年が入って来ようとする瞬間が赤フィルターをかけて撮られている。全くありふれた日常的なもの、既知のものを極端に非日常的に、感性に反するようにとり扱うのがポストモダンの特徴だ、と言える。前衛において一旦破壊された伝統的なものや日常目に触れ

る形象が素材として復活して来たところに着目して、曾つてJ・ハーバースはポストモダンを「新歴史主義」と「新保守主義」として批判した⁽³⁾のであるが、我々はむしろ、その点にこそ現代の人間の分裂した意識の一つの顕著な現われを見ることができるのである。

現代世界は、過去から伝えられた遺産や他の人間によって製作された既成品とそれらのコピーとで充ち溢れている。どちらを向いても、物に満されている。ケージのような前衛芸術家は、過去の貴重な遺産例えば、ベートーヴェンの作品の構造そのものを打ち壊すことによって道を開いて行ったのだが、現代のポストモダンの芸術家達には、もはや破壊すべき物が無い。それらは全て現代世界のメカニクなシステムの部分品として存在しているのである。そういう仕方では現代の間には物の存在の真実への道が初めから閉ざされている、と言える。物の現在性に触れられなくなっている。過去から、現在から、東から、西から沢山の物が集められて、何でも手近に有るということは、何も無いということと同じになる。ボタン一つの操作で手帳に、また気軽にベートーヴェンの全交響曲の完璧な演奏が聴けるということは、我々から「ベートーヴェン」が失われたということをも意味する。ポストモダンの芸術家達は、過剰な物の海の上に漂いながら、物を享樂しながら、しかも、どこにも物の存在の真実に触れ得なくなっている現代の人間の姿を表現しようとしている、と言えるかも知れない。そこでは、ベートーヴェンもスマトラの民謡も、機械の噪音も寺院の唸経も等しく素材となるのである。芸術家は、自らの創造活動もまた、巨大な産業社会に組みこまれた需要と供給のメカニズムの中の一つの下

請けの仕事に過ぎないこと、従って、自らの創造により物の存在の真実が開かれるわけではなく、むしろ人間と物の有り方が愈々分裂して行くことを自認しながら、その、無限に分裂して行く世界を愉しむ如く、常に新たな発想、素材の組み合わせの思いつきに向って行く。皮肉なことに、彼等の個性や独創性の追求、ユニークな「パフォーマンス」自体が既に画一的である。物の充溢における底知れない空虚、物の現在における非在、個性追求における画一性——ポストモダン・アートは、そのような現代人の心の、曾つて無かったような深い「分裂」を如実に表わしているように思われる。

註

- (1) ジョン・ケージ『サティ擁護』(秋山邦春訳)、『ユリイカ』一九七八年八月号、一三三頁。
- (2) 同『ロバート・ラウシェンバーク』(同訳)、同、一四二頁以下。
- (3) Habermas, Jürgen: Die Moderne—ein unvollendetes Projekt (『近代——未完成のプロジェクト』、Die Zeit, Nr.39-19. Sept. 1980, S.47f.

6 現代の歴史と宗教の問題性

二十世紀後半が世界の歴史において画期的であるのは、歴史が初めて、真の意味で「世界歴史 world history」になったということである。過去においては、歴史はヨーロッパ、インド、中国という風に別れていた。たとい世界の歴史が統一的に見られたとしても、それはヨーロッパ中心の歴史であったし、南半球の諸地域はずっと歴史の外に置かれていた。

ようやくヨーロッパ中心の歴史観が実際に崩れたのは、第一次世界

大戦後に、アメリカやソ連、中国や日本が政治的な力を持って来たときからであった。そして、第二次大戦後になると、第三世界の国々が次々に独立し始め、歴史が多元的になると共に、もはや地球の上のどこにも、他から孤立して閉鎖的な歩みが続けて行くことが可能な民族や国家が存在しないようになった。かくして、現代において、世界が一つの世界に、そして、歴史が「世界歴史」になったのである。

現代の世界においては、地球上のいかなる国も、いかなる個人も、「世界歴史」の構成要素をなしている。

例えば、アフリカの或る二つの国の間に起っている戦争は、単に当事国同志のことに止まらず、世界のあらゆる国が常に何らかの仕方ですれにコミットせざるを得ないものであり、それは直ちに南米や東アジアの市民の日常生活に影響を及ぼして来るのである。そして、曾つて凡そ世界の歴史上に現われたことの一度もなかったそれらの国々の歴史と現状、経済と文化が世界の人々の目を引き寄せ始めるのである。

世界の歴史を単に、エジプト、ギリシア、ローマ、中世キリスト教、近代市民社会そして現代という風に発展して来て、それに色んな時期に、地球上の大小の民族が次々に参加して来た、という風にヨーロッパ一元的に考えるのは、既に十九世紀のヨーロッパ人の思考法である。ヨーロッパの歴史だけでも、もっと多面的に見直すことができるはずである。否、むしろ、ヨーロッパこそ多面的重層的な構造をなす世界だ、と言わねばならない。

だが、ヨーロッパはともかくキリスト教という宗教によってヨーロッパ人の自己形成と自己理解とが決定されて来た世界と見ることがで

きる。そして、世界には、現代においても、過去においても、ヨーロッパ人とは違った形で人間とその過去とを理解した多くの民族が存在しているのであって、ヨーロッパの歴史が直ちに人類の歴史、「世界の歴史」と考えることは、歴史理解の方法として問題を有するのである。キリスト教によって決定されたヨーロッパ精神そのものも、単にキリスト教的に、あるいはギリシア的ヘブライ的のみ考えようとせず、もっと違った視点から見直すことも可能であるはずである。況して、「世界の歴史」はヨーロッパの歴史を中心に据え、これを原型として考えることはできない、と言わねばならない。それはまさしく「世界の歴史」として、世界から、あらゆる人間がそこにおいて有り、そこからそこへと生きる世界から考えなければならない。特に、キリスト教と非常に違いながら、少なくとも同じ深さで人間の問題に触れていることを認めなければならない宗教が他にも存在するのである限り、キリスト教とヨーロッパが世界の中心になることはできない。キリスト教もまた世界から見直されねばならない。

そういう、視点の根本的転換が今世紀に起って、特に両世界大戦の後に、交通や通信の機関が発達し、国と国との間の距離が縮まり、また、核兵器、機械技術文明による人間疎外と環境破壊、エネルギー危機、人口急増と食料難等の人類の存続を脅かすような事態が生じ、しかもそれが加速度的に進行していることが明らかに成って、世界全体の立場から、人間について言えば、「全人類 all mankind」の立場から、あらゆる事柄を考え、問題を解決して行くことが必要となり、またそれが可能となりつつあるのである。現代はまさしく国際の時代で

ある。政治や経済は勿論、学問、芸術、スポーツも、更には宗教も、国境を越えた交流や協働を行いつつある。

だが、しかし、人類の未来について、今日、尚、我々に希望を抱かせてくれるように見えるこうした世界の現状においても、我々は、決して樂觀を許さない人間の存在の根本的「分裂」におつかる。それは先ず、言うまでもなく、世界政治の局面においてはっきりと現われている。武器、特にそれを実際に使用するならば、人類全体が減じることが確実であるような核兵器の保有量を競い合い、その力の均衡によって国家ブロックと国家ブロックの間の戦争を防ぐということ程人間の存在の「分裂」を示すものは他に無いであろう。ブロックとブロックの間を同じ人間同志としてつなぐものもはや無くなっている。一方の存立を貫こうとすれば、他を否定せざるを得ない。だが、武力衝突による相互の人的物的損害は回避されねばならない。もし一度武力の衝突を生じたならば、当事国ばかりか、地上のあらゆる国のあらゆる人々が壊滅的な被害を受けることは明らかである。そこで、両ブロックは武力の増強による力の均衡を維持しつづけることにより、武力の実際の衝突を回避し、各々の存立を確保する道を選んでいるのである。しかし、武力の強さを競い合うことにより武力の衝突を防ぐということがいかに矛盾したことであり、それ自体がいかに人間性に反することであるかは誰の目にもはっきりしている。それがさし当って戦争を回避させているにせよ、どんな危険なことであるかもよく解っている。しかも現代の人間、現代の国家はこの怖るべき現実を打開する方途を知らないのである。世界が国家を単位として成り立っており、

それぞれの国家の存立の確保は、それぞれの国家がその軍事力によって行わなければならない、そしてその軍事力の保有のためには、それぞれの国家が経済力を蓄積しなければならない、というような在り方が現代の世界の政治の体制をなしている。従って、国際の時代といっても、現実の世界政治は、国家間の力関係の調整手続きに他ならず、真に世界の立場、人類全体の立場に立って、世界の建設を計るものではない。結局、そこで問題なのは国家の存立と利害であって、世界の真実の在り方ではないのである。世界がまさしく世界としてたち現われて来たのが現代の世界であるのに、決して世界から世界を見ようとせず、どこまでも国家間の力学的関係のみを問題にするところに、我々は、現代の世界における人間の存在の根本的「分裂」を見ることが出来る。

今、世界政治において見た人間の「分裂」は、実は、今日盛んになりつつあるあらゆる国際的な交流や共同事業においても認められるものである。

例えば、スポーツに国境は無い、と言われる。スポーツは政治的關係とは独立に、違った国々の人達を結びつける。だが、今日、オリンピックのような国際競技大会において我々のしばしば経験することは、スポーツが国威発揚の道具にされるということである。スポーツ選手の成績と国の軍事力や経済力とが比例しているのが現実のスポーツの世界である。

同様の現象は芸術においても、諸科学においても、更に宗教においてすら見ることができよう。今、真に求められているのは、世界の立

場に立った人間の活動である。政治家であれ、科学者であれ、芸術家であれ、宗教家であれ、彼等の個性豊かな活動が真に世界の場に開き出され、世界のために貢献するようになること、そういう仕方で彼等が個人として直ちに世界人となって生きることができるようになることが重要なのである。だが、実際には、人間のどの分野においても、世界に対して自己を閉じ、逆に世界を、あるいは国際を自己満足的排他的なセクショナリズムの手段となす傾向が極めて強く存在していると言わねばならない。

人類の歴史に最終的に関わりを持つのは宗教である。なぜかという点、人間の窮極的関心事である、個人や社会の目標、理想、永遠の絶対的な生命等への問いにはっきりした答えを提供するものが宗教だからである。

この故に、あらゆる歴史観は原初の神話に源泉を汲むのである。例えば、ヘーゲルの精神的歴史観、マルクスの唯物論的歴史観等も、現実の矛盾を止揚して出現する地上の王国に神の国の到来を見るのであるから、根本的には、キリスト教の救済史観の変容、その近代的ヴァリエーションとすることができようであらう。

そういう点からすれば、世界が真に世界に、「一つの世界」になって来た現代において、世界の宗教者達が一堂に会して祈りや冥想を共にし、現代の世界の諸問題や来るべき世紀の宗教の在り方を討論し始めたのは大変好ましいことである。歴史の問題の決着は、最後には宗教にかかっている、ということが「聖なるもの」の逃げ去った現代においても、やはり言うことができるからである。つまり、世界が無限

に多様に分れながら、しかもいつでも既に端的に一つの世界であり、歴史はその一つの世界の自己展開に他ならない、ということを書いて得るのが宗教という立場なのである。

それ故、今日、東西の宗教者達が、その叡智を傾け合って様々な新しい試みをはじめたことは、時代の要求に適うものだ、と言うことができる。「出合い」、「対話」を通してより深い真理内容とより広い展望とが得られるし、更にそれが刺激となってそれぞれの宗教がその自覚を深めて行くようになるであらう。あるいは、元来他に対してイントレラントであることを本質的性格として有する諸宗教が相互の「対話」を始めたこと自体が、既に世界の新しい自己展開だ、とも言うことができる。

だが、ここでもまた、我々は現代の人間の存在の「分裂」に出会うのである。そして、この「分裂」は最も根本的本質的な「分裂」なのである。

「分裂」は、諸宗教と世界との間に見出される。つまり、諸宗教から帰納的に導かれ、あるいは諸宗教の普遍性への要求から立てられる一なる世界と、人間が初めからそこにあり、そこから考え、行為する世界、諸宗教の世界も実はそこから成立する端的な世界との間に「分裂」が存するのである。諸宗教には、皆宗祖や教理が有り、体験や伝統が有る。宗教者の存在の根拠は、歴史の中に示現したこれらの絶対的なものに見出されるのである。しかし、この絶対的なもの自体が今日の世界においては相対化されざるを得なくなっている。無論、本来の絶対者は決して相対化されざるもの、決して滅びることのないもの

である。そして、まさしく、今日、人類の歴史の危機に直面して、世界の側から宗教に投げられている課題とは、決して相対化されざる真理、人間とその歴史のアルファにしてオメガをなす真理の証示に他ならぬ。現代の混沌とした世界の中の個々人に、彼等の畢竟一様と見える日常的営為と生涯とに一つの不動の道理を指し示し、また、苦悩と悲惨とに満ち、意味の全く見えない人類の歴史に、それにもかかわらず、一つの真実な、窮極的な意味を明らかにすること、我々の有限な、結局相対的ではないこの生において無限な絶対的なものをはつきりと証すことこそ、宗教の責務である。だが、宗教者達の現代における仕事は、むしろ、彼等が存立の根拠を見出す宗祖、教理、体験、伝統等の特殊なものの相対化と、その相対化による自らの存立（その絶対性、しかも相対的絶対性）の確保ではないようである。彼等にとっては、何らかの有形の特殊な権威によって有限な生を根拠づけ、更に、そのようにして根拠づけられた生存を保全するために、神々の和解する多元論的多神教的世界を構築することが最重要事であるように思われる。それ故、現代の宗教者は原理的に保守的である。古い有形の特殊な権威に依り頼んで生存を根拠づけることと、類似の構造を持った他の宗教との「対話」、共働、共存の運動を進めることによってそのような在り方を集団的に保全しようとすることは、相補的な関係にある、と言わねばならない。

我々がこの、今日の世界の宗教の在り方と、先に触れた現代の世界の政治の在り方との間に、一つのはっきりした対応を見出すことは容易である。どちらの場合にも、一つの世界がたち現われて来た現代に

おいて、世界に対し自己を閉ざす意志が、古い権威や権力に頼って自己の特殊な存立を確保しようとし、更に、このような存在の仕方を集団的に保全しようとしているのである。

したがって、今日の宗教者は、決して歴史の意味、人類の希望の置き所を真剣に問題にしない。そのことを如実に示すのは、宗教哲学や歴史哲学の貧困である。人間は自らを無限に越えて自らを見出し、現す、という人間の本来の課題を忘却してしまったかのようである。現代において人間のこの本来の課題を明らかにし、人々の前に説き示すことは大いなる率直さとたくましい勇気とを要することである。而して、世界が全体的に問題化する形で一つの世界がたち現われて来た時代にはんとうに必要であるのは、人間がその本来の課題のもとにたち帰り、それをはつきりと確認することのはずである。政治においても芸術においても、あるいは、宗教においても、存立する特殊な立場から考える従来の思惟を越えて、まさしく世界の立場から、すなわち人間の存在の真理の開けから、この、人類の未来から考える思惟へと出て行くことこそ現代における哲学的思惟の使命をなす、と言ってさしつかえないであろう。それは、実に、現代における「思惟方法のコペルニクスの転換」なのである。

このことは、宗教における、否、宗教ばかりでなく、歴史的存在としての人間のあらゆる営為における、伝統と創造との関係の問題にも関わって来る。現代の宗教者は一般に保守的である。つまり、過去の形、すなわち伝統の権威への依存を宗教的生の本質と考える。このことには二つの理由が有る。一つは、人間は自己を越えた何かに存在根

拠を求めて、それによって自己を立てようとするが、過去から伝えられた聖なるものの形こそ依存の最有力な対象となる、ということである。それ故、古来、宗教はそのような、伝統の形への依存と考えられたのである。あと一つの理由は、現代の進歩する技術と物量の文明が人間の生存の土台をつき崩して行くにつれて、不安になった現代人の中に、こういう文明が出て来る以前の存在の仕方根源的なものを見直し、それを保存し、あるいは回復しようとする気運が高まって来たことである。しかし、いずれにせよ、そうした在り方において問題になるのは、宗教における伝統と創造、歴史と超歴史、時と永遠の「分裂」である。本来の宗教性とは、まさしくこの二つが分れない在り方である。真の伝統は、創造的生の継承であり、真の歴史は超歴史的なものの生起である。瞬間々々が無にして絶対であることによって時のつながりが可能になるのである。伝統の權威の所在は、実は、どこまでも時の瞬間の無にして絶対であるところに求められるべきである。キェルケゴールの言った如く、我々は、この瞬間において、イエスと同時の場に立つのである。⁽¹⁾そして、このような、時の只中に垂直的に永遠に接する生が歴史的生起の根源となり、現代文明の崩壊し行く現実をむしろ創造の素材に転換する積極的な働きをなすはずである。

現代の宗教の在り方において顕著な、過去の權威、伝統の形を保守し、弁護する傾向は、自らの外の他者によって自己の存立を保全しようとする他律であって、真に現実を批判し、創造して行く力をなすものではない。従って、このような宗教が現実に向う場合には、それは現実の政治や経済の体制と直接に結合してこれに精神的支柱の意味を

与えることになるのである。だが、宗教本来の在り方は、どこまでも歴史の直下に歴史を越えた永遠の生命を覚し体得することに存する。現実と超越、時と永遠、歴史と超歴史、伝統と創造等が分れないのである。伝統は創造的生の体得反復であり、創造的生は伝統の中核への自由な参徹である。このように、伝統と創造とが不二であるところに真の根源的な歴史が成り立つのである。

近代における人間の在り方で一番大きな問題は、現実と超越、時と永遠の不二の宗教的リアリティーが見失われたことに存する、と言える。それは、現実から超越の契機が脱落して、現実が唯現実だけで見られることを意味する。しかし、人間の現実において超越の契機が脱落するということは、生存に意味を与える統一が喪失することである。人間はそれだけではすまないのである。我々はここに、現代における人間の「分裂」の根を見ることができであろう。現代において、宗教への問いは最も根本的な問いである。

註

(1) Kierkegaard: *Einübung im Christentum*. この書全体が歴史における実存の同時性の問題を論じている。

第五節 人間の諸営為の問題化

前節で、我々は、現代において人間の存在が全体的に問いになっている状況を、具体的に、現実の人間の営為に即して考察して来た。この考察において我々は既に諸領域の問題にやや深く立ち入り過ぎた感じもする。しかし、それだけに、現代における人間の問題状況を如実

に鮮明に描くことができたであろう。

教育において、医療において、環境において、社会において、芸術において、また、歴史と宗教において、一体、我々が今日いかなる問題状況に直面しているかが具体的にはっきりして来た。問題は現象として多岐多様である。だが、我々は、そのいずれにおいても、現代の人間の存在の「分裂」を認めたのである。一応、人間の存在の「分裂」が現代世界の問題の本質だ、と言ってもよい。

人間に限らず、全て存在するものは無限に分化する方向と無限に統一する方向とから成り立っている。物が有るということはそこにおいて無限な分化と統一とが成り立つことである。そして、物がいわば高度に発展し成長を遂げるにつれて、分化と統一の両方向が強まるのである。

一例を挙げるならば、単なる物質の段階では、分化の方向はほとんど無い。統一も、結晶や分子のような構成要素のメカニカルな結合に過ぎない。これに対して、生物になると、生命体の器官の分化と中心におけるその統一とがはっきりと現われて来る。高等な生物程そうである。分化と統一が最も進んだものは、言うまでもなく、人間である。そして、近代という時代は人間の存在の諸契機がそれぞれ分化し発展して行き、遂にそれぞれの局面において、また全体としても、統一を見出すことがなくなるまでになった時代だ、と考えることができる。すなわち、近代の人間の存在の「分裂」は、人間の意識の発展上に必然的に出て来なければならぬ事態なのである。しかも、いかに複雑化したとしても、「分裂」が存在するからには、必ず統一も無け

ればならない。現代の人間の諸問題がいかに深刻であるにせよ、その解決も必ず何らかの形で見出し得るはずである。唯だ、近代人の分化発展した意識の統一は、分化発展する意識の延長線上の未来には求められないであろう。分化発展する意識の統一は、意識に即してしかもこれを越えた、意識の分化発展を縦に断ち切るような統一でなければならぬ。そして、実はここに、近代的世界の問題の固有な、一番根本的な困難が存するのである。

それはともかくとして、現代が、近代の人間の存在において極度に深まって来た「分裂」が人間自身にとって一つの大きな問いになった時代であることは、前節の分析によって我々に明らかにになったはずである。

例えば、現代において、根本的に医療の有り方が問われているのであるが、それは単に医療の内部の種々の問題ではなく、そこで、「生・老・病・死」ということと人間との関係が、というよりもむしろ、「生・老・病・死」する人間の存在そのものがあらためて問いになったのであり、また、「生・老・病・死」する人間の実存と近代医療技術との間の「分裂」が大きく問題化して来たのである。それは、結局、医療において、人間とは何か、人間が生きているとどういうことか、ということが真剣に問われていることを意味する。

同じく、教育の場合でも、現代では、教育、すなわち、自己形成する人間の存在そのものが問われている、と言わねばならない。人間を形成する、と言うときに、形成されるべき人間とは何か、人間を形成するとはどういうことか、が問題になる。近代の人間はそういう点を

自明にして来たのである。知性とか、個性とか、全体的人間とか、そういうものを問おうとしなかった。それが現代に来て、あらためて大きく問題化した、と言うことができる。

我々は同様の省察を環境、社会、芸術、歴史、宗教等についても行った。そして、それらのいずれにおいても、人間の存在の「分裂」と全体的問題化とを指摘したのである。

現代の世界においては、人間のあらゆる営為において人間自身の存在が問われる。そのいずれにおいても、人間の存在の「分裂」、崩壊が生じて来ている。

そして、そのときには、同時に、人間のそれらの種々の営為、人間の多面的活動自体も問いになるのである。教育において「画一的教育でなく、個性化をめざす教育を」というスローガンがなされるとすれば、現代においては、人間の個性というもの、自己性というものと共に、教育そのものが問題になる。勿論、現場の教育者は自らの学んだ知識と理論とを駆使し、教育者としての使命感に従って、その都度全人格を傾けて教育の事柄に当らねばならない。知識の正確さ、思考の論理性、美への感動の豊かさ、道義への潔癖さ、無私な行為への勇氣等は、いつでも教育者が生徒を前にして貫徹しなければならない徳性である。だが、今日のように、教育がシステム化され、更に、企業化され、集団的に営まれる状況においては、もっと根本的に、教育という人間の営為自体が問いになって来た、と言わねばならない。知識を学ぶことが、あるいは道徳の教育すらが、人間の人間性に対し否定的に働き得るものだからである。

同様に、今日では、人間の全体性の中で医療とは一体何か、ということが問われている、と言わねばならない。そのことは決して自明ではない。勿論、医療従事者は、その都度、自己の良心と使命感とに従って、近代の技術を用いた処置を選択して医事に向って行くことになる。病み苦しむ人の苦しみを和らげ、その命を可能な限り延ばすことは医療にたずさわる者の至上命令とも言い得る。しかし、その場合でも、人間の生、人間にふさわしい生は、常に決して自明ではないのである。生の量的なひき延ばしが直ちに人間にふさわしい生である、とは言えない。芸術について言えば、現代では、新しい創作であれ、過去の作品の再現であれ、全て芸術活動は、芸術とは何かの問いとそれに対する答えとの提示を意味している。今日程、人がなぜ、どのようにバッハやベートーヴェンを弾くのであるとか、技術文明の中での芸術とは何であるか、等の問いが人間自身にとって重大になって来たことは曾って無かったことである。

宗教についても、今日のような、世界の問題状況においては、例えば、キリスト者はキリスト者であること、キリスト教を信ずることがどういうことであるかを根本的に考えなければならぬ。神の存在、聖書の機能、教会の意味等は、どれ一つ取ってもキリスト教という宗教の存立にかかわるものであるが、それらが一々、今日では決して自明でなくなっているのである。たとい誰かがキリスト教信仰の立場を全面的に肯うことができたとしても、そういう信仰の、現代世界の問題状況における位置づけ、意義等を考えるならば、その、肯われた立場自身がもう一度問い直されるはずである。

無論、仏教者にとっては、仏教者であることは自明なことではない。例えば、禪者にとって、祖師、打坐、公案等は一番根本の事柄になる。けれども、現代世界の問題状況からするならば、禪のこうした歴史的に成立して来た事柄が一つ一つ問いに付せられるであろう。禪という宗教の本質は何か、宗教において伝統とは何か、が問いになる。それを問わなければ、現代においては、宗教は現実の要求に適わなくなり、現実から遊離したものになってしまう。宗教というものの存在理由すら、今日では問題となるのである。結局、宗教とは何であり、人間の存在においていかなる意味を持っているのか。それは無くてもよいものか。無くてはならぬものであるか。

かくして、現代世界の問題状況においては、人間の存在とその世界及びその世界において人間の営む活動の全体が、人間自身にとって一つの問いになった、と言うことができる。見方を変えて言えば、人間存在の問題的な性格、つまり、それ自体が矛盾をなし、自身にとって問いになるという人間の存在の固有な性格が、文明の歴史の経過と共に、特に科学技術の世界の体制が完成した姿を取って人間とその世界を根本的に規定するようになった現代に到って、愈々はっきりと現出して来たのである。

無論、過去の人間においても、人間は常に人間自身にとって問いとなっていた。自らの存在が自己自身に問いとなるところで、人間は哲学や宗教の現実に関われ、自らの存在の深部に触れた。

しかしながら、過去の人間の場合には、人間の存在が問いになったと言っても、まだ真の意味で全体的にはなかった。

現代において、例えば、芸術というものの存在が解らなくなっているとするれば、そのことは、同時に、人間の存在の根拠そのものが人間自身にとってあやしくなって来たことに他ならない。それは、芸術が人間の本質的営為だからである。芸術の存立の問題は単に芸術の問題に止まらず、人間の存在可能な問題である。

これは、他のあらゆる分野の問題についても妥当する。人間のあらゆる局面に起っている問題は、実は人間の深部で皆一つにつながっており、従って、どんな問題でも、それ自体が常に、人間の存在そのものへの問いに深化し得るものなのである。